

中山道伝説

三吉と小女郎

絵文 遠山 文枝

参考文献

昭和四十九年十一月三日

恵那市発行 恵那市史

恵那市の昔話と歌



昔中野村の桑下に三吉といつオスギツネと羽白の三郎

小女郎といつメキツネが住んでいました。とちからさ

化け上手でキツネ仲間の評判になってしまった。

そして二匹はお互に「オオがうまいが、あたしがうまいと

自信を持ってた」と言い合ふ。

三

三

吉

と

と

小

女

郎

ウ

中

山

道

中

野

村

昔ばなし

郎

ウ

昔、森に三匹の狐が住んでた。お母さん狐と二匹の子狐が住んでた。お母さん狐は、お月様さま、お天道様さま、お日様さま、お花さま、お虫さま、お鳥さま、お山さま、お川さま、お谷さま、お池さま、お田さま、お畑さま、お家さま、お村さま、お国さま、お世界さま、お宇宙さま、おすべてさまを愛して、お幸せに暮らしてた。



ある日ははたり三吉と小女郎が山道で由会いました。お互に競争心を燃やして「ぶん化ける」とはすべのほつかなつまいと「ぶん、あたしのほつがすつまいとつまいもやと」と思ひました。

そして「つまい合つていました。
いといふ由会ったな」と一匹は思いました。
やるか」と二匹とも、思いました。
一匹は腹にグリーンと力を入れ、
足をよいしょとしっかりと踏み張りました。
一匹ともしかり心の中で呪文を唱えました。





ます、三吉が「なに」の勝負オレがもらった。」

三吉は食べずにやりかえしておいて、クルクルクルリン

まあ、かわいいお寺の小僧さんになりました。

お互いオ、まあ、見とらんじょーと、「二匹ともれから出会う場所
や審判のキッスを決めて別れました。

三吉はかわいい小僧さんに化けて待っていました。

夕方近くになって、家帰ろうと急いであるおじさんに、「おじさん、今日は疲れたでしよう。ちょっと休んでいたらどう？」とお百姓さんを

誘い、その中じれ回り、畑の中のぼたて小屋をお寺の観音堂と思わせて、「なんまむだん、なんまむだん」と、ありがたがって、拜んだりさせました。

またはお腹のすいている様なおはめさんには、「美味いうどんやがあるで」と、道はたの無小屋で草をいはい集めてきて

「うまい、うまい」と、食べさせたりして村の人たちを困らせて、小女郎と化け競争をしていました。



今度は小女郎はちよと考えて

きれいな女の子になりました。

あんまりきれいな三吉もびっくりしたけれど、

「ふん、何だ。」またまた自信をもっていました。

小女郎はちよと一杯飲んだお兄さんに

「まあ、すてき。お兄さん、遊んでいかないの？」

なんて言って、汚川連れて行って

水あびをさせたりしました。



きれいなお姉さんから「い宿屋案内しますよ」
なんていわれて汚い小屋で腐りかけの堆肥にする
コマを羽布団と間違えて朝まで寝ている

お兄さんもありました。

ばかりがふりはたいたもので村の人の困るのも
ちよびと同じくへららんとどいてとて審判から
「」の勝負引き分けとなりました。



でも 意外なことが起りました。
だんだん二人はお互いに好きになりました。
でも二人はお互いに素直に自分の心の
ことを思っていたりもケンカばかりしてしまっ
ても 時にはケンカを忘れて仲良くお芋を
焼いて食ったり、かわいい小僧さんと
きれいなお嬢様で、いのまにか
おデートするようになった。



「三吉さん、お花さん、モシモシして
小女郎、小女郎、好きだよ」
小さなブルボロトがいそいそ二人を

仲良く仲良くさせてくれました。
お花もぎれいに咲いて二匹を祝福して
くれました。

こうして三吉と小女郎は結婚した
いと思つたようになりました。けれども
二匹のお父さんやお母さんも、そして
もちろん羽白のきつねも、桑下の
きつねも大反対じゃったぞな。
でも、二人はそこにおデートを重ねて
おりました。お花もお天道様も親切
でした。



「お花さん、お花さん、モシモシして
小女郎、小女郎、好きだよ」
小さなブルボロトがいそいそ二人を

仲良く仲良くさせてくれました。
お花もぎれいに咲いて二匹を祝福して
くれました。

こうして三吉と小女郎は結婚した
いと思つたようになりました。けれども
二匹のお父さんやお母さんも、そして
もちろん羽白のきつねも、桑下の
きつねも大反対じゃったぞな。
でも、二人はそこにおデートを重ねて
おりました。お花もお天道様も親切
でした。

いじも仲間に見張らわたり二匹は抜け出すことになりまなく
なりました。

父親ギツネも母親ギツネも、いじも三吉や小女郎を見張りました。
穴を脱げ出るふきもありませぬ。でも、三吉は男の子です。
とうとう、脱げ出る機会を見つけました。
そしてとうとう、穴を脱げ出ました。



三吉はさっさと逃げ出すことに成功したのだ。さっさと羽白のキツネにみつかってしまい、大乱闘になりました。

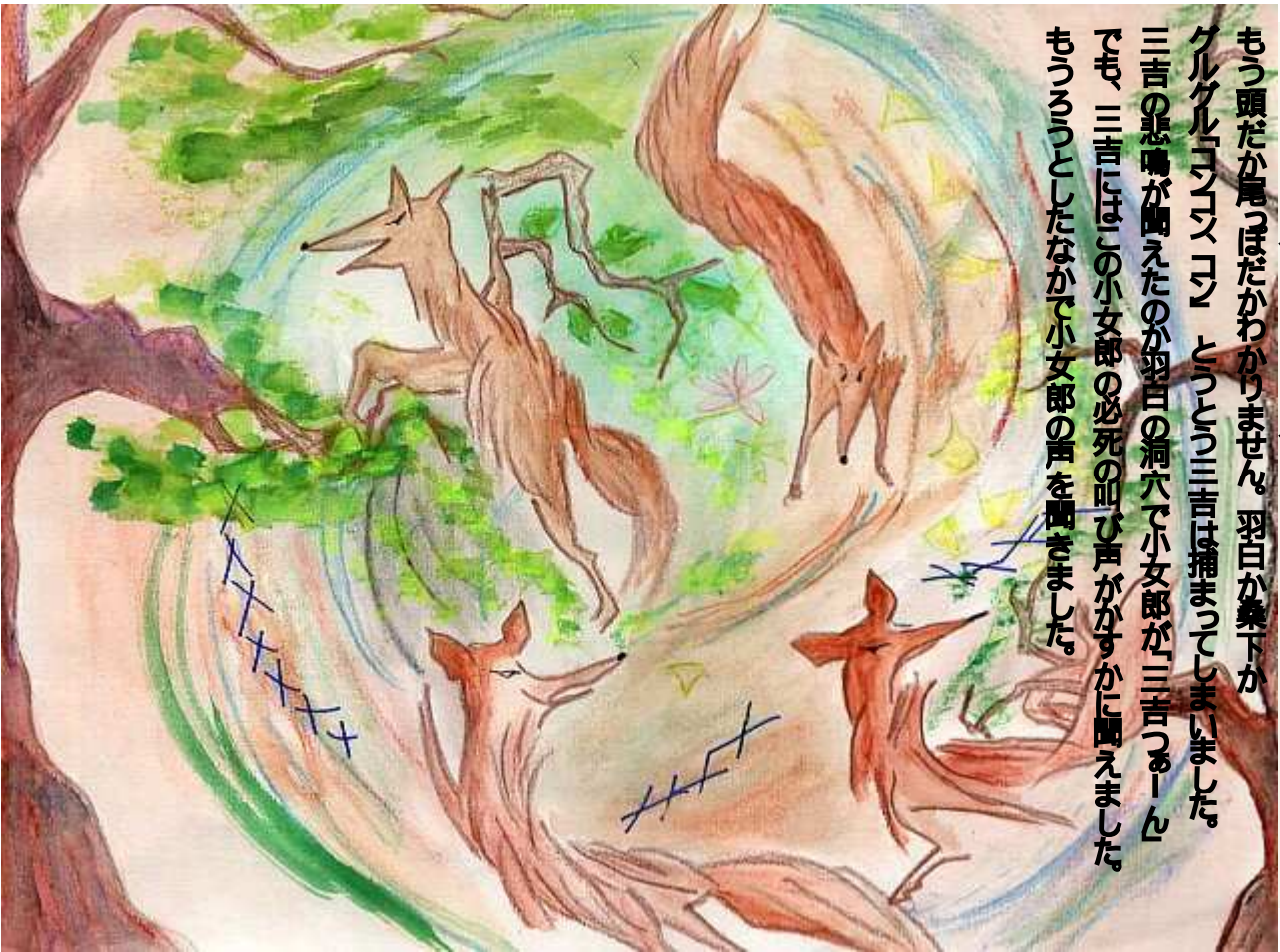
「キヤッ キヤッ」、「クソクソ」、「クソクソ……」

もう頭だか尾だかはだかわかりません。羽白が鼻下かグルグル「クソクソクソ」として三吉は捕まっています。

三吉の悲鳴が聞えたのが羽白の洞穴で小女郎が「三吉、おーん」

でも、三吉には「小女郎の必死の叫び声がかすかに聞えました。

もしも……としたなかで小女郎の首を聞きました。



やっと桑下のキツネ穴まで三吉はたどり着きました。
ひどく怪我でした。がとうとう死んでしまいました。
お父さんキツネも母さんも姉さんキツネもみんな泣きました。
大粒の涙はいっぱい流れ落ちました。
キツネ穴にもお山にもその日はキツネ火も燃えず、
暗くひっそりしていました。
そして、コンコンコンと、低い泣き声が
お山の風に乗って何処までも低く、低く流れました。



三吉は死んでしまいました。三吉の亡くなったことは葉下から羽白の山に伝わりました。小女郎の耳にも伝わりました。それからの小女郎は山陰の切り株にもたれて「三吉もさ、三吉もさ」と三吉の名をささやいて泣いてはかりました。涙が枯れるほど泣いたあと、みんなの隙を狙ってとうとう首をついて死んでしまいました。



時は移り、ケンカ続きのお山にも新しい時代が訪れました。

キツネたちの居場所はだんだんせばめられました。

いじのまじかごとも少なくなり悪さをする話も聞かなくなりました。

今でも雪の降る寒い夜にはキツネの鳴き声が聞えるそう。

なんだかかわいく、懐かしいですね。

三郷稲荷はもういっせいの後にはまたとこいっせいです。

三吉と小女郎という紙芝居をさせていただきました。

中山道中野村に伝わる昔話

人から人へずっと長間、語り継がれたお話はじか語り継ぐ
人がいなければ忘れ去られてしまいます。

ジジサマババサマの話は故里で生まれ

故里で育った大切な心の財産です。

伝説と昔話は縁をひくことができません

ただ、消えさせたくないのです。語り伝えてほしいのです。

祖先から受け継いだ郷土の最大の遺産を八十才の

ババアばばの力にも限界があります。

麻痺した手の日本の指が私の宝物であり、

最高の宝です。